

## ハマは植民地である



山田長夫

〈横浜市大教授〉

5月3日の祭日に、神戸の友人を案内して横浜見物をした。横浜と神戸は、よく比較対照されるライバルの国際港都である。この友人はオリエンタル・ホテルの支配人であるから、参考になるいろいろの意見もきけると、この機会を楽しみにしていた。しかし、横浜の何処を案内したものか迷っていた。午後1時にホテル・ニューグランドのロビーでおちあい、ルーフのバーでグラスを傾けながら語り合った。ホテルのロビーは、貨物線の高架が邪魔になって、港の景色がみえないが、バーからはよく見える。幸にもこの日は雨上りの快晴で風強く波立っているが、海は青くよい眺めであった。スモッグの日であったら、スモッグのない神戸の空と海の話が出て、うらやましい気持を強めたであろう。友人はしきりに港の眺めの美しさに感嘆していた。私は横浜の近況を報告して、意見をうかがった。

横浜は戦後米軍の占領が広範囲かつ長期間にわたったため復興が他都市に比べて著しく遅れたこと。しかし数年前から大きな変化がおこって、急激な人口増加となって、180万人の大都市にふくれあがってきたこと。根岸湾が埋立てられ工場地帯となったし、本牧に新しい埠頭ができあがりつつあって、海が完全に市民から奪われてしまったこと。港が現在では必ずしも横浜の心臓部でな

く、港湾都市、工業地帯、ベッドタウンとしての東京の衛星都市の3つの性格をもち、いわゆるハマの性格がうすれてしまっていること。それから飛鳥田市政の構想の都市づくりについて。これらはいま日本中いたるところにみられる都市集中に共通の諸問題を含んでいるが、できるだけ問題を横浜にしぼって報告した。さて、実地見学というので、ホテル前でタクシーを拾って出かけた。港の見える丘をすぎ、海に見える道を走らせて、小港へ下って行った。この道は昔よく散歩したなつかしい道で、ハマの山手の代表的景色の道である。自動車の往来が多くなった昨今、散歩のたのしみも半減されるので、近頃歩いたことなく、車で通るのも久々であった。やはりいい場所だと思ったが、昔に比べて荒れている感じだ。戦前外人の貿易関係の人々が住んでいた頃は、建物も芝生も植込みもよく手入れされていて気持よい道であったが、住む人が変わったのであろう、床かしと思わずような家がみられなくなった。小港に下りると駐留軍の住宅群、昔チャブ屋のあった場所やおちついた住居の並んでいた所に、バラックや駐留軍の施設があって、この一角は日本でない。間門の切通しを抜けると、昔は海の眺望がひらけたところに、石油のタンク群である。プリンス・ホテルで降り、テラスから埋立地をみた。海が遠くになり、工場もまだ未完成のため緑のない味気ない空間がひろがっている。友人は神戸にない横浜の美として低い丘陵群をしきりに賞める。たしかに神戸の六甲山は高くけわしく海岸に迫っているの、街は海岸沿いにその裾に細長くつらなっている。横浜の丘のおもしろさはない。この丘陵は横浜の財産ではなかろうか。その利用の仕方ですばらしい街づくりも可能ではないだろうか。しかし現状はこの丘陵の緑を奪って赤肌をむき出し、雑然とした住宅群を作っている。飛行機の上から見る横浜は丘陵の緑の美しい都市であるが、この美がこ

こ数年にむざんに破壊されてきた。この破壊の爪跡は建設のためのやむを得ないものであろうか。友人は、市民から海が奪われてしまったこと、緑がブルドーザーでけずりとられて行くことなどは神戸も同じで、そのうちに日本中そうなるのではないかという。ハムレットのなげきではないが、「Economy Horatio Economy！」で、経済優先の日本のなせるわざである。私はここで、佐藤春夫氏の遺稿の詩をおもい出した。「現代日本を歌ふ」と題して、

国破れて山河あり 秀麗なりしを  
背に腹は代へがたく産業大いに興り  
空にはスモッグといふ毒霞立てこめ  
清流は毒液をまじへて死魚を浮べ  
大臣はトランジスターのセールスマンを兼ね  
＜中略＞

テレビジョンやラジオや  
アンテナ林なして家々に行きわたりぬ  
一億白痴化とは言はじ  
もと賢明なるにあらねば  
「着ものは着れる、物は見れる、彼女は来れる  
わかりかシカシハッスル」とやら  
卑俗なる国語の普及に日も夜も足らず  
蓋し文部省の亡国語教育に協力するか  
その美化と純化とは忘れられ  
国語だに満足に語り得ざるは  
げに奇怪無比の文化国なるかな。

そこで話題は経済産業をすてて、使われている言葉になった。私は関西に出かけたときいつも神戸に行くと妙に気やすさを感じる。国際港都であるからだろう、横浜に在るのと同じ気やすさを感じる。そこには大阪とも京都とも違ったものがある。その一つが言葉でいわゆる標準語である。私は個人的経験として、標準語の使われている都市を知っている。朝鮮の京城であった。もちろん戦

前の日本の統治下にあった京城のことで、私は昭和12年から4年半そこで教鞭をとっていた。そこで話されている日本語は標準語であった。当時の京城の人口は100万、そのうち日本人は13万人ほどであった。関西、九州の出身者が多かったが標準語が使われていた。何故であろうか？ 私はいわゆる標準語が植民地的なものでないかと思っている。標準語というよりも共通語であって、方言の特色あるものをなくして共通に使えるものが、日本語の標準語となったのではないかと思う。京城しかり、横浜、神戸しかり、またよく知らないが札幌もしかりであるらしい。そのうち人口異動の多い日本の大都市の言葉はほとんど標準語になって行くであろう。この標準語は江戸の言葉をもとにしたものであるが、江戸はもともと諸国の人の集ってつくった植民地的都市であった。17世紀末にすでに人口100万をこしていた江戸は、荻生徂徠の言を借りると、『江戸は諸国の掃溜＜はきだめ＞』であった。諸国の方言をもった人々の共通語として発展したのが、われわれの標準語である。横浜も神戸も『諸国の掃溜』で発展してきたので、標準語が容易に使われてきたのではないだろうか。

『しかし、』と友人はいう。『神戸の言葉はきたないよ。ひどくきたない言葉だ。』私はこの言に反撥はしない。京城時代の教え子たちは自分たちの言葉は標準語だと自慢していた。しかし私たちがきいては、似て非なるもので、きたない乱れたものにきこえた。横浜の標準語も似たようなもので、きたないといわれてもいたし方ない表現が多い。それを純化するのは、標準語を使っていると信じ切っている者だけに反って至難のことであろう。むしろ地方の訛りを恥ずかしいと思っている若い人々の方が正しい表現を容易に身につけるのではなかろうか。年間1万3千から5千入ってくる勤労青少年＜15才から18才＞に、国語教育を与え

ることの意義がそこにある。正しい言葉を使っていると信じて、似て非なるものと思わない連中は度しがたいものがある。

横浜は植民地的性格の都市である。横浜村の住人がいまの横浜をつくったのでなく、開港とともに諸国からやってきた人々が作った街である。横浜の発展は『諸国の掃溜』のおかげである。それは日本人だけでなく、世界全国から集つてきた外国人の共同作品である。横浜が伸びるかぎり、全国から人も資本も集つてきて協力してくれるだろう。西口の発展もそのスタートは横浜土着く？>の人の仕事ではなかった。横浜の伸びる道は、大手をひろげて新しい人々を迎えることではなからうか。開港諸時国から一旗あげようとして横浜村にやってきた人々の子孫が、ハマッ子となっているが、ともすれば先祖のたくましさをなくし、既得権益のうえにあぐらをかき、これを守ろうとするのは、自己どうちゃくである。

大仏次郎氏は横浜を舞台にした小説をいくつか書いている。とくに開港時のが多い。そのうちの1つに『その人』というのがある。旗本の御曹子で鳥羽伏見の戦いに敗れ、上野でも敗れ、奥州にまで走ったが、ことごとく敗れて、横浜にやってきて人足になって働いている若者の話である。その昔を知っている町家の娘が、世が世ならばと同情のことばをいう。若者は毅然として答える。いな、これでよいのだ。何もできないくせに、さむらいだからと威張っていた昔があやまっていた。私はここへ来てはじめてほんものの人間の生活を知った。これが正しいのだ。という意味の答えである。開港時の横浜の姿を実によくとらえている、と感動して読んだものである。古い日本人から、新しい日本人への脱皮をうながす力がハマにあった。民主主義とか市民社会とかいうものが、そこに現実に働いていたのである。この旗本の若者と同じ自覚をもった人々く恐らくみな若い人々であ

ったろう>が横浜をつくり、日本を作ってきたのである。横浜がこれからどう変貌しようとも、開港以来の開放的な伝統だけは失いたくない。横浜に来る人々にいつも他処では味わえない開放感のある土地であって欲しいものだ。

横浜の文化の不毛性がよくうんぬんされる。私もこの問題で何か意見をともとめられ、筆をとることになったが、文化を芸術・美術・音楽等々に限定していくと、私として語るべき何もも持っていないこと、したがって語る資格のないことをますます強く感じてきてひるんでくる。それにもかかわらず、あえて書きつづつたのは、ひとつだけ、植民地的性格という言葉に迷わされて自らを卑下し、本質的でないものを他に求めてはならないという警告をしたかったからである。一例にあげた標準語の純化などは、横浜で大いにやるべき事業と思う。美しい標準語く共通語以上のもの>をつくる努力を皆協力してやりたい。横浜はその資格をもっている。文化の創造というのも案外こんな基本的なものの積重ねからではなからうか。芸術家はほんらいきわめて個性的なもの、生れてくるもので、かけ声などでつくれるものではない。ハマッ子の芸術家はいくらでもいる。その有名な人々の名をならべることはいらない。その人たちは恵まれた幸運な人々で、その人たちの蔭には無名の人がいくらもおるだろう。芸術の世界では、他の世界でもそうであろうが、芸術の世界ではとくに、生存中に名をなし、その作品がほんものであると正しい評価をうけることは比較的少なく、その保証はない。ラスキンの『芸術経済論』ではないが、若い芸術家の卵の意志を挫けさせないで大成させるにはどうしたらよいか。原三溪翁のようなパトロンの輩出を期待するのも一つであろう。横浜の悲劇く文化の不毛>は、一代にして産をなした明治のハマの財閥が永続させずに、その多くが没落したことにあつたといえよう。この没落が

なかったら三溪翁のような人々がなお多く出て、メディチ家のフローレンスに似たものをつくりあげたかも知れない。関東大震災、第二次大戦の戦災と、たび重なる不幸が横浜を叩きのめしたが、したがって10年ほど前には横浜は斜陽都市とあわれみの言葉をかけられたこともあったが、現在は事情が違ってきた。横浜はいま一つのルネサンス期にある。横浜の港は再び神戸をしのいで日本一の貿易港となる。大正末期までの日本経済は、輸出として第一次産業の製品しかなかった。生糸がその大宗であり、一時は輸出の70%を占め、横浜は繁栄した。横浜が神戸に席を譲ったのは関東大震災の傷手だけではない。輸出の中心が繊維工業品に移ったからである。ランカシャーを抜く日本の紡績工業の躍進が、神戸港を繁栄させた。横浜の後背地<ヒンターランド>には繊維工業がなかった。戦後の日本経済の躍進は、先進国なみの重工業国にし、輸出の中心もここに移った。かつての生糸貿易は今日では輸出の1%を占めるかどうかとなっている。生糸中心なら横浜港は没落の一途であつたらう。重工業となると横浜港の後背地は大きい。港はルネサンスを迎えつつある。それが文化に、とくに芸術とか文化に何のかかわりがあると、人は性急に問いたいだらう。三溪翁のような個人の富はあるいはもはや夢物語りかも知れない。しかし市民の富が芸術に悪影響ありとの証明はない。いかに芸術に理解あつても、営業不振の会社の社長は何もすることができない。ハマには三溪翁のやったことに及ばずとも力の範囲で協力したいと思い、現にやっている実業人がいる。うしなわれたものをなつかしむ懐古趣味ではなく、開港時の開放的精神の伝統をもって、文化に理解を示している頼母しいハマッ子がいくらもいる。具体的に示さないが、私は明るく前途をみている。

プリンス・ホテルを出て車をひろい、緑のうしなわれていない根岸の丘陵をのぼり、旧競馬場、フェリス、外人墓地とコースをとり、中華街入口で降りた。中国人の集団居住地区の姿は友人をよるこぼした。神戸には戦後なくなったとのこと。表通り裏通りと歩き、中国人のおちついて住んでいる風景を見た。中国人には横浜は住みよい地であろう。時間がないというので元町に出て別れた。私の案内したコースは横浜の一部にすぎない。三溪園に寄らず、ザキヤ西口にも行かなかった。しかし、私にとっても友人にとっても、これで十分であつたと思う。この友人は大学の先輩であるが当時家は上海にあり、父君は居留民団長をしておられた。中国に行きたくありませんかと問うたら永住が許されるのならともかく、短期間の旅行ではね、との答え。男子2人の子があり、下の方も来春大学を卒業する。いまの子らは日本から出たがらない。海外に骨を埋める気がないようだ、とさびしがっていた。

戦後の日本は住み心地よいのか、学生はじめ若い人々で海外雄飛の夢を一度もみたことのないのが多い。横浜市立大学の学生の70%余は市外出身で、しかも全国から集っている。せつかく横浜に学んでいるのだから、港をよくみなさい。波止場にぼんやりとたたずんで、国旗の違う出船入船を眺め、何国語かよく判らない船員の会話をきいている数時間は決して無意味な時間でない、とすすめているが、市民の子弟でも港に関心がないのが多くなった。横浜はもう港中心の街ではないという声をよくきく。180万の市民が港に拠って暮らしているのではないことは事実であるが、やはり横浜は広い意味のミナトの街であつたし、今後もそうであろう。ミナト横浜の特色ある文化がいつかは強く根を張って花ひらくことを信じて、辛棒強く待っていよう。